

東北学院大学教職員修養会 キリスト者教員研修会 報告書

第 13 号

巻頭言

2011 年度 第 57 回教職員修養会（震災のため開催せず）	
2011 年度 第 16 回キリスト者教員研修会報告……………	3
2011 年度 第 37 回サマー・カレッジ報告……………	19
2011 年度 宗教活動報告……………	39

東北学院大学

宗教部長 佐々木哲夫

1 いかにか幸いなことか。神に逆らう者の計らいに従って歩まず、罪ある者の道にとどまらず、傲慢な者と共に座らず、2 主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人。3 その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び、葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。4 神に逆らう者はそうではない。彼は風に吹き飛ばされるもみ殻。5 神に逆らう者は裁きに堪えず、罪ある者は神に従う人の集いに堪えない。6 神に従う人の道を主は知っていてくださる。神に逆らう者の道は滅びに至る。(詩編第一篇)

冒頭に「いかにか幸いなことか」と記されている。その指示対象は「神に逆らう者の計らいに従って歩まず、罪ある者の道にとどまらず、傲慢な者と共に座らず、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人」(一～二節)である。

神に逆らう者とは、神に対して悪意または邪悪さを持って事を企てる者のこと、また、罪ある者の罪とは的外れを意味し、神という目標から外れて生きている者のこと、傲慢な者とはあざける者のことで、三つの姿は渾然一体となって神に逆らう者の姿を描き出している。対照的に神に従う者は、そのような生き方と一線を画すだけでなく、むしろ、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむというのだ。

そのような生き方が招く結果も言及されている。「風に吹き飛ばされるもみ殻。裁きに堪えず、神に従う人の集いに堪えない」(四～五節)であり、「流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び、葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす」(三節)というのである。

詩編第一編から教えられることのの一つは、日常をどう生きるかということだ。日常は、平凡でつまらないものの繰り返しではなく、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむならば、流れのほとりに植えられた木のように実を結ぶのである。特に、東日本大震災で亡くなった多くの犠牲者たちのことを思うとき、彼らが望んでも生きることのできない日常に私たち

は今生かされていることに気がつかされる。私たちが作りだし、体験し、苦悩している日常は、永遠に向かって作り、体験し、苦悩しているものなのである。

私たちは、東北学院大学が流れのほとりにある教育機関であることを知るものとしてその働きに参加したいと思う。本報告書が東北学院大学の歩みに貢献することを願っている。

2011 年度

第 16 回 キリスト者教員研修会報告

第 16 回キリスト者教員研修会プログラム

日時：2012（平成 24）年 2 月 21 日（火）

14:00～19:30

場所：仙台国際ホテル

総合司会 大学宗教主任 出村みや子

時間・会場	内 容
14:00～14:30	<p>開会礼拝</p> <p style="text-align: right;">司会・説教 大学宗教主任 野村 信</p> <p>讃美歌 6 番 聖 書 イザヤ書第 2 楽章 6 節～ 22 節 説 教 「共同体を生かす」 祈 禱 讃美歌 502 番</p>
14:30～14:45	<p>コーヒーブレイク</p>
14:45～15:45	<p>主 題「東北学院建学の理念を今に活かす」</p> <p style="text-align: right;">司会 大学宗教主任 原田浩司</p> <p>講 師 平河内健治理事長</p>
15:45～17:00	<p>自由討議</p> <p style="text-align: right;">司会 大学宗教主任 北 博</p> <p>発題をめぐって</p>
17:00～19:30	<p>クリスチャン・フェローシップ</p> <p style="text-align: right;">司会 大学宗教主任 永井義之</p> <p>閉会</p>

主題講演「東北学院建学の精神を今に活かす」

理事長 平河内健治

1. はじめに

今回発題をさせていただけることになり、感謝いたします。今回は、めずらしくも、私の方からお話をしてもいいですよと伝えていたものですから、実現できたことは大変有難いという感じはあるのですが、生来臆病者でもありますので、負担と不安をも感じております。しかし、本日は、キリスト者として東北学院に奉職する者の使命感というものを土台にして、建学の精神を今に活かす施策に何が考えられるかという、いわば、私の夢と言えるものを、勇気を奮って皆さんに披瀝し、東日本大震災後の東北学院の復興計画の一端としていただければ幸いです。

話の順序としては、東北学院建学の精神を、震災を経て、私自身がどのように受け止めているかを、特に、今年になって、中高・大学・榴ヶ岡の礼拝で与えられた御言葉を通して学んだことを先ずお伝えし、次に、星宮学長の下、暗黙の内に前提となってきた東北学院大学の将来に関するビジョンとキャッチ・フレーズとしてしばしば言及される「日本で最も若者の心を育てる大学」を具現化する具体的施策について、学校運営という観点から考察してみたいと思います。

震災後のA Cジャパンのコマーシャルで話題になった言葉に「<こころ>はだれにも見えない けれど<こころづかい>は見える」と「<思い>は見えない けれど<思いやり>はだれにでも見える」というものがあります。これは宮澤章二という詩人の「行為の意味」という題の詩からの引用であります。全文は次のようなものです。¹⁾

(1) ——あなたの<こころ>はどんな形ですか

と ひとに聞かれても答えようがない
自分にも他人にも<こころ>は見えない
けれど ほんとうに見えないのであろうか

確かに<こころ>はだれにも見えない
けれど<こころづかい>は見えるのだ
それは 人に対する積極的な行為だから

同じように胸の中の〈思い〉は見えない
けれど〈思いやり〉はだれにでも見える
それも人に対する積極的な行為なのだから

あたたかい心が あたたかい行為になり
やさしい思いが やさしい行為になるとき
〈心〉も〈思い〉も 初めて美しく生きる
——それは 人が人として生きることだ

詩人宮澤章二は 2005 年 3 月 11 日に 85 歳で亡くなっていますが、この詩人は全国の小中高約 300 校の校歌を作詞し、30 年間に渡り埼玉県の中学生のために、ある教育関係の出版社が毎月発行している冊子に、一遍の詩を贈り続けたそうで、上記の詩はそのうちの一遍のようであります。

東北学院の建学の精神は、〈こころ〉でもあり〈思い〉でもあります。私たちが生きるのに神様から求められている「ふさわしいこころ」と「ふさわしい思い」であります。これらが「こころづかい」として「おもいやり」として「見える化」され、行為化される時に建学の精神は美しく生き、私たちも人として生きることが可能となります。具現化の基本は『東北学院規程集』の巻頭に示された理事会宣言にある毎日の礼拝であり、正課としての聖書に関する授業であることは当然のことではあります。これらのみに限定すると、キリスト者の非合理的な特権意識への誘惑に陥る危険があります。「教える」という上からの目線になりがちだからであります。キリスト者であろうとなかろうと学校構成員が協力し合って、学校運営全体としてその具現化を目指さなければならないことは言うまでもありません。

「東北学院の建学の精神をどう今に活かすか」ということは建学の精神の「見える化」と「行為化」に他ならないので、これらについて、本日は特に学校運営の観点からお話をさせていただきます。

その話の前提となる東北学院建学の精神や学院スピリットである 3 L 精神を、御言葉を通して確認する作業を先ずしてみたいと思います。

2. LIFE、LIGHT、LOVEとはイエス・キリストご自身

今年 2012 年 1 月 23 日(月)の東北学院中学・高等学校の朝の礼拝で与えられた御言葉は(2)に示した新約聖書ヨハネによる福音書第 12 章 27 節から 36 節 a まででした。これについての学びを中高礼拝でお話をし、同じ日の土樋キャンパス大学礼拝と 3 年生最後の

礼拝となる1月26日(木)の榴ヶ岡高等学校礼拝においても、聖書の箇所は奨励者に選んで欲しいとのことでしたので、中高で与えられた同じ箇所からの同様の学びを伝えました。

(2) ²⁷「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。²⁸父よ、御名の栄光を現わしてください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現わした。再び栄光を現わそう。」²⁹そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは、「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。³⁰イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。³¹今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。³²わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」³³イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとしてこう言われたのである。³⁴すると、群衆は言葉を返した。「わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならない、とどうして言われるのですか。その『人の子』とはだれのことですか。」³⁵イエスは言われた。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。³⁶光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」(ヨハネ 12:27～36)

1月23日(月)の大学土樋キャンパス礼拝にご出席の何人かの方々には重複した話で申し訳ありませんが、「3Lとはイエス・キリストご自身である」という観点からもう一度お聞きいただければと思います。

ここに記されているのはイエスの昇天についてのお話です。ここで、イエスは無実の罪で裁判にかけられ死刑となることを覚悟しておりました。むしろ、それによって人々の罪が贖われ、罪の赦しを受け、私心や我欲の囚われから救われ、永遠のいのちを得るようにすることがご自身のこの世に遣わされた使命であることを承知しておりました。イエスはご自分の死について「わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現わして下さい。」と祈ります。すると、「わたしは既に栄光を現わした。再び栄光を現わそう。」と天から声が聞こえてきます。

「神の栄光を現わす」というのは自分の生涯がどのようなものであれ、神に導かれ神に祝福されたものであることがすでに示されており、そのことを示そうとするということになります。生涯が短かろうと長かろうと、病苦があろうとなかろうと、それが多かろうと少

なかろうと、どのような生き方、死に方をしようとも、死までの生は神の導きに従った、少なくとも従おうとした恵みの生活であるという信仰であります。神を指し示す意味ある生き方、死に方があることを言います。

愛する者の死も、私たちに何らかの学びや恵みを与えてくれたが故に意味ある死であり、そこに神の栄光が現われます。妙な言い方かもしれませんが、私たちはいつでも安心して死んでいける存在であります。神様が現にいることを指し示すことができるからというのです。心がけ次第で大いに実現可能なことです。エリザベス キュープラー・ロスという精神科医の『死の瞬間』(中公文庫)や同じく精神科医のフランクルの『それでも人生にイエスと言う』(春秋社)などの著書の中でも示されています。²⁾しかも、現に今生きている者は死者とも対話できる存在であり、死者から学ぶことができることは、死者は今現に生きている者とともにあることを意味します。それ故にこそ、死者の追悼をし、鎮魂と復興を祈る「東北学院東日本大震災追悼礼拝」(2012年3月11日(日)の午後に予定)は意味を持ちます。死者は生きていると言えます。

28節にある天からの声は、ある人には雷の単なる轟き、ある人にはイエスに向けられた天使の声と聞こえます。しかし、イエスは「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ」と、あなたがたに関係ない声ではなく、むしろ、あなたがたに向けられたメッセージだと言うのです。

イエスの「御名の栄光を現わしてください」という祈りは神の子イエスが人間イエスとして死を目前にしての肉体的な心の動揺から発せられたものともみられますが、むしろ、自身の死の意味が人々に伝わるかどうかの瀬戸際においての「自分の死の意味が伝わりますように」という切なる祈りでありました。自分の死に神の栄光が現われますようにとの祈りでありました。神は「わたしは既に栄光を現わした。再び栄光を現わそう」と応答します。

一方、人々は、メシアは永遠にいつもおられるはずなのに、この世から姿を消してしまう「人の子」には半信半疑の想いがあります。イエスは「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」と強く信仰を促します。

イエスはこの世に遣わされた光であり、その光の子となるためには、人の子が生きている内に、暗闇である悪魔の誘惑に追いつかれ取り付かれる前に光であるイエスを信じるよう人間への愛を込めて奨めています。そのことによって、イエスが上にあげられた後も、人々がこの世で生涯を終えても昇天したイエスと共に永遠の命を保てることを約束します。まさに、キリストは私たちにとってL I F E(命)であり、L I G H T(光)であり、L O V E(愛)であります。3 Lとはキリストを指します。また、3 Lとはキリストと共にある私た

ちでもあります。キリストの愛によって日々甦り、隣人への愛の奉仕をし、人々に希望を与える神の栄光が現われている存在であります。

3. 離反することが見通されているリーダーとしての私たち

しかしながら、そのような神の栄光が現われている存在でありながら、私たちは神様から離反してしまう存在でもあります。折角光であるイエス・キリストに照らされて、光の子として歩み得る存在であるにもかかわらず、キリストの傍に余りに近く居るが故に、かえって、キリストが光であることに無関心となってしまいます。このことは(3)に記してある新約聖書マタイによる福音書第26章31節から35節のところから学ぶことができます。これは本日の朝の榴ヶ岡高等学校の礼拝で与えられた御言葉です。

- (3) ³¹そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずく。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散ってしまう』と書いてあるからだ。³²しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。』³³するとペテロが、「たとえ、みんながあなたにつまずいてもわたしは決してつまずきません」と言った。³⁴イエスは言われた。「はっきりしておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。』³⁵ペテロは「たとえ、と一緒に死ななければならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」と言った。弟子たちも皆、同じように言った。(マタイ 26:31～35)

ここでイエスは十字架につけられ死に赴く前に、ユダの裏切りのみならず、他の愛する弟子たちも最後には自分から離反することを予告します。自分是一番弟子と考えていたペテロは「みんながつまずいても、私だけは決してつまずきません」と宣言します。これに対して、イエスは夜が明ける前に三度もイエスのことは知らないと言おうと述べます。

ペテロは「と一緒に死ななければならなくなったとしても、あなたのことを知らないなどと決して申しません」と応答します。他の弟子たちも同調します。結果的には裏切ることになることを知っている私たちにとっては、このやりとりはこっけいにも見えてきます。「たとえ死んでも先生とは一緒です」と一人が述べ、他の一同が、「そうだ、そうだ、その通り」と一斉に声を挙げ、先生に嫌われないよう一所懸命先生に取り入っている姿にも見えてくるからです。

イエスは愛する者たちの裏切りを見通しておりました。このような者のためにこそ自分の死が意味をもつことを見通していたのです。私たちはイエスを愛しているのもかわら

ず、命の危険に会うと、簡単に関わりを捨て、神を裏切る存在です。

しかし、同時に、イエスは、私たちがこのような存在であるにもかかわらず、イエスに立ち返ることも見通しておりました。実際イエスは 32 節に予告されている通り、復活した後にガリラヤに姿を現わし、弟子たちの信仰を復活させ、ペテロはイエスを頭とする教会を作り、殉教の死を遂げたといわれます。

弟子達は裏切るというイエスの見通しと、後に立ち返るというイエスの見通しは、31 節に引用されている預言者ザカリアの言葉である「わたしは羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散ってしまう」というところにも示されています。これだけでは十分理解しがたいので、(4)に示したザカリア書の 13 章 7 節から 9 節(旧約聖書 1493 ページ)までを読んでみましょう。

(4) ⁷ 剣よ、起きよ、わたしの羊飼いに立ち向かえ

わたしの同僚であった男に立ち向かえと

万軍の主は言われる。

羊飼いを撃て、羊の群れは散らされるがよい。

わたしは、また手を返して小さいものを撃つ。

⁸ この地のどこでもこうなる、と主は言われる。

三分の二は死に絶え、三分の一が残る。

⁹ この三分の一をわたしは火に入れ

銀を精錬するように精錬し

金を試すように試す。

彼がわが名を呼べば、わたしは彼に答え

「彼こそわたしの民」と言い

彼は、『主こそわたしの神』と答えるだろう。

ここにはすべての羊飼い、すなわち、すべての指導者が^{そく}即神の道を伝える人であるとは限らないことが記されていると思います。指導者の三分の二は万軍の主^主に撃たれ、死に絶え、三分の一が残るとあります。神の試練を受けても三分の一しかよき指導者にはならないというのです。神はこの三分の一を「火に入れ、銀を精錬するように精錬し、金を試すように試す」と言っています。イエスの十字架上の死という試練、そこからの関わりから逃げようとする悪魔の誘惑に会う時に、神の愛の徴であるイエスの復活の信仰に立ち返る者が必ず何人かいるという見通しをイエスは持っていたのです。

そのような指導者とは一体どのような人を言うのでしょうか？一人一人がイエスの弟子

である私たちも、言わば、東北学院共同体に神の国を建設し、神様の道を伝える伝道という使命をもった指導者・リーダーであります。すでに『東北学院時報』の1月号の理事長年頭所感で述べている通り、人間関係での権力欲や名誉欲を超えて、小さい者を愛し(ルカ9章48節参照)、仕える(ルカ22章26節参照)人であります。これについては『大学礼拝説教集』³⁾にも掲載していただくことになっております。また、弟子たちの足を洗ってくださったイエス・キリスト(ヨハネ13章5節参照)にその具体をみることができます。ルカ14章33節の「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだけ一人としてわたしの弟子ではありえない」というイエスの言葉によって、弟子としての条件として、「己を捨てる」ということが求められています。これらはまさにイエスご自身の生と死でありました。

このように、イエスに倣う生き方こそが私たちリーダーに求められている生き方であり、指導者としての生き方はイエス・キリストの生涯に「見える化」されています。このような生き方を教育研究共同体であり、宣教共同体でもある東北学院の学校運営にあてはめると、どのようになるかを次に考えてみたいと思います。

4. 建学の精神の見える化

東北学院大学の将来ヴィジョンとして、暗黙のうちに了解されているものがあります。例えば、(5)に示した平成19(2007)年5月28日付で「東北学院大学の将来計画について(東北大学片平丁の南地区の購入を前提としての検討)」という星宮望大学長から当時の大学長期計画委員会大塚浩司委員長に宛てた諮問書の中に[参考事項-C]として添付された「東北学院大学の将来に関する学長としてのビジョン」にも反映されています。大学長期委員会内と理事会長期委員会と常務理事会内のみを開示され大学内には一般公開されていないのでここでは星宮先生に許可を得て掲載してあります。

(5)1. 建学の精神を継承・発展させる

- ・福音主義キリスト教に立脚した人格教育
- ・大学礼拝の重視とキリストの福音の伝承

2. 国際的な視野で地域貢献でき、急激に変化する時代を生き抜くことのできる能力のある人材を育てる

- ・思想、芸術などの分野における人類の知的資産を理解し、それらに裏付けられた国際通用性のあるセンスを涵養
- ・自己判断力の涵養に必要な教養教育の重視
- ・外国語によるコミュニケーション能力の涵養

3. 特色ある研究／教育体制を整備して独自性のある教育を提供する

- ・ 研究実績のあるグループの研究の推進をはかる
- ・ 多くの人材を輩出している分野における社会人再教育を充実
- ・ 中高大の一貫教育での特徴ある成果を期待

以上をまとめると、

東北学院大学は、今後とも、教養教育重視型の大学として人格形成への取り組みを重視し、社会へ貢献できる能力と気力を有する人材を育成することを最重要事項として取り組んで、『日本で最も若者の心を育てる大学』としての存在意義を主張していきたい。

(平成 19 年 5 月 28 日付星宮望東北学院大学長より大塚浩司長期計画委員会委員長宛ての「[諮問] 東北学院大学の将来計画について」添付資料：「東北学院大学の将来に関する学長としてのビジョン」)

ところで、平成 17(2005)年 1 月 28 日に中央教育審議会は「我が国の高等教育の将来像」を答申し、第 2 章の「新時代における高等教育の全体像」第 3 節「高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化」の中の(2)として、「大学の機能別分化」を提案しています。(6)に示しました。これらを併有する大学であっても、その比重の置き方を明確化することが求められました。

- (6) ① 世界的研究・教育拠点
② 高度専門職業人養成
③ 幅広い職業人養成
④ 総合的教養教育
⑤ 特定の専門的分野(芸術、体育等)の教育・研究
⑥ 地域の生涯学習機会の拠点
⑦ 社会貢献機能(地域貢献、産学官連携、国際交流等)

上記(5)に記した「東北学院大学の将来に関する学長としてのビジョン」の2と「まとめ」の部分から、東北学院大学の機能の特性・特色を見出すことができます。(6)の④の「総合的教養教育」と(6)の⑦の「社会貢献機能」となります。(5)の1の「建学の精神の継承・発展」は私立学校としての根幹であり、東北学院創立者の一人であるウィリアム・E・ホー

イが明治 25（1892）年の東北学院開院式で強調した「キリスト教に基づくリベラル・アーツ教育」のビジョンは、（5）の 1 と 2 に受け継がれています。また、（5）の 3 の「独自の研究」は大学の教育が学術研究に基礎をおくことを考慮すれば、当然のことです。このようにして、東北学院大学は私立の高等教育機関としての使命を社会的要請に応えながら果たそうとしております。

しかしながら、（5）の 1 は、「はじめに」でも述べた通り、単独に独立しているものではなく、学校運営全体に反映されるべきものであります。さらに付け加えるならば、東北学院大学は地域に開かれてきた大学であり、地域での同窓生の社会的活動に顕著なものがあります。大学キャンパスは地域への広がりをもっています。地域の学習共同体が大学であります。私はこのような学習共同体の運営の原則として三つのことを繰り返し述べてまいりました。持続性、適切性、妥当性の三つであります。学校運営上の「持続性」とは多文化の尊重と自由・平等・博愛等の普遍的価値観の継承と会計学上はゴーイング・コンサーンであります。「適切性」とは、ルールに従っているかどうかのコンプライアンスと運営行為の記述的な正確さであります。「妥当性」とはルールそのものが説明的妥当性をもつかどうかや内部統制であります。これら三つの運営原則を支配しているのが「建学の精神」という尺度であります。この観点からの対話が学内外に継続するのが私どもの使命でもあります。

このような学校運営上の観点から大学ビジョンの具体化や建学の精神の「見える化」を考えた時に、東北学院大学がその大学としてのプレゼンスを高め、今の時代に養成される価値観を伝え、その価値を備えた人材を育成するための学校運営上の施策として次の（7）が考えられます。これは昨年 9 月の公認会計士のヒアリングを前にして、星宮学長のビジョンに添って理事会が後押しできる施策はあるか、特に、キリスト教大学としての特色（ブランド）をアピールする具体的施策があるかどうかを探った私自身の私的メモにあるものであります。私個人としては今も是非実現させたいものばかりであります。

- （7） 1. LIFE、LIGHT、LOVE の LED 広告灯を土樋キャンパスに掲げる
2. 土樋と泉の礼拝堂ステンド・グラスの維持
3. シップル館（旧デフォレスト館）の保存
4. 学生アルバイト斡旋の NPO 法人「労働会」の設立
5. 青根遊休地の利用について学生に公募し、起業体験をさせる
6. 宣教師的働きをする英語教師を大学所属契約講師として雇用し、大学だけでなく法人各設置校の英語教育に寄与してもらう
7. 工学部にチャプレンを配し、工学部礼拝堂を幼稚園保護者卒園児の伝道を目的に日曜礼拝教会として開放

(7)の1から3はすべて建学の精神の視覚的なシンボルであり、まさに、「見える化」であります。すでに、東北学院発祥の地である仙建工業ビル前に記念碑を建て、ビル一階を借りてサテライト・ステーションを開所して地域との学習共同体のエクステンション的役割を開始したところであり、また、東北学院中高跡地には3Lの碑を建て、東北学院の歴史の足跡を残したところですが、旧南六軒丁の土樋キャンパスは現に今建学の精神を発揮する現有地であり、特に、中高や榴ヶ岡に比して、大学では3Lの影は薄いので、キリストを示す3Lの広告灯を燈したいというのが、私の希望であります。

ステンド・グラスは視覚的な物語であります。絵によって物語ることは文字によって物語る以上の記憶上の効果がある場合があります。先月訪れたランカスター神学校では、そのチャペルのステンド・グラスの一枚一枚の説明を受けましたが、そこにある一つ一つの物語は印象深いものでした。その中の一枚には神社の鳥居が描かれ驚きましたが、宣教師の世界への派遣を示す一枚でした。

3のシップル館はこれから「旧デフォレスト館」と呼ぶことにしましたが、米国宣教師の働きとキリスト教文化交流のシンボルとして保存することは法人長期委員会で決定し、文化財としての登録も視野に入れて保存を検討していただいているところであります。明治学院の旧宣教師館のイーブリー館よりも一年古い建物です。実現できる見込みがあり、嬉しく思っているものです。

(7)の4は学生が在学中に働く体験を提供することによって社会への関心を深め仕事の意義と人間としての生きがいを感じるよう手伝うことが何かできないかという発想のもと考えたものです。現在アルバイト委員会というものがありますが、もっと積極的に大学が関われないかという発想です。労働会という組織をかつて運営し、働きながら学ぶ学生の援助をしたという伝統の復活であります。

(7)の5の青根遊休地というのは青根セミナー・ハウスという合宿所の跡地ですが、今は更地になっているところです。私自身は教職員のいわゆる Kleine Garten とか学生・生徒・教職員・同窓生の食教育のための畑などの利用など同窓生でもある川崎町長始めとする地域の方々との協力で、何か東北学院関係者のみならず地域のための公共的目的をもった利用の仕方はないものかと考えているものですが、今回は柴田副学長からの提案を入れました。ハーブ栽培の部活もあると聞いています。七ヶ浜町の高山にも遊休土地がありますが、七ヶ浜町に高台移転の復興計画があり、何らかの協力ができれば、これもまた建学の精神を今に活かす取り組みとなることが期待されます。

(7)の6と7が私の特に今日強調したいところです。私が留学させていただいた1969年はヴェトナム戦争も終結し、日本が経済大国となり、米国の教会は日本への宣教師派遣を縮小し始めた頃で、私が米国のUCBWM (United Church Board for World Ministries) か

ら奨学金を得た時は、Student Missionary と呼ばれ、これからは日本が宣教師を派遣する時代になったと言われました。しかし、日本の教会はキリスト教学校と切り離されてはその勢力の拡大は困難を極めているのが実情です。十分分析はしておりませんが、日本へのキリスト教伝道は近代教育の実りの摂取と宣教のバーター取引によって現在の教勢を保っています。

また、今はリンガフランカの役割をしている英語の力をつけ国際的に活躍できる人材を養成しなければなりません。工学部応用物理学科同窓生の札幌琴似工業高等学校の高橋柱子教諭は WRO の大会を目指す生徒の指導をしているとのことですが、大会の公用言語は英語なので、生徒とともに英会話の勉強を始めた先週土曜日の北海道教職員 TG 会発足総会でおっしゃっていましたが、それだけのニーズがあるわけです。かつて誇りにした「英語の学院」を復活させる近道は外国人英語クリスチャン教師と接触させるのが近道です。東北学院の建学の精神のルーツであるランカスター神学校のリッチ学長とメールでの遣り取りができるようになったので、是非進めたいと思っています。

(7)の7については、折角、園保護者が、幼児教育によって育てられた神に近づこうとする子ども達の清らかな心を感じ取りそこから学んだ東北学院建学の精神をブラッシュアップする機会や子ども達の神を求める気持ちをファロウアップする機会である次の成長過程を大事にしたいという思いがあります。チャプレンという形でなくともこの責任をもてる牧者が必要とされると思います。

5. おわりに

最後に、志願者が昨年今年と減少している東北学院大学に希望はあるのかという話をし、発題を終わりたいと思います。勿論これは私がすでに平成 24 年度予算方針まがきの中でも言及していますが、震災で話題になった「正常性バイアス」というものを認識した危機意識というものを前提にした上でのものです。(8)に示しました。全体は 3 月 2 日の理事会に提案されるものです。

(8) 東北学院は、キリスト教を拠り所とする建学の精神である 3 L (L I F E、L I G H T、L O V E) の学院スピリットに基づいて、世界の平和と人類の福祉に寄与できる人材の育成と人格の陶冶に努め、この建学の精神と価値観を共有する地域社会と学習共同体を形成することによって、社会貢献と地域の活性化に奉仕する教育・研究を展開し、国内外に幾多の地の塩・世の光としての優れた人材を輩出してまいりました。

本学院のこの教育事業を持続的に発展させるには、何よりも財政基盤の強化と財

政の安定化、特に支出超過部門の改善が急務であります。そのためには、先ず教育内容の質の向上によって、社会的な評価と信頼性を確保し、多くの学生生徒児童に選ばれる学校にしなければなりません。また、中学校・高等学校、榴ヶ岡高等学校、幼稚園では人件費の抑制に努め、消費収入の均衡を図り、大学は補助金の制約に柔軟に対処する等、基本的には中期財政フレームに基づいた予算編成をする必要があります。東北大学片平校地南地区の土地全面取得については、震災の影響による東北大学の都合によって変更せざるを得なくなりましたが、一部は取得可能となったため、総合キャンパス整備計画の中で基本金組入れは維持いたします。無駄を徹底して排除し、経費の節約・削減に努め、学納金収入のみならず、確実な収入の確保に努めることは当然のことです。

平成18年に約60年ぶりに教育基本法が改正され、人格の完成と個人の尊厳という旧法の趣旨に沿いながらも、新しい時代に向けた国の教育基本理念が示され、平成20年4月には今後5年間の具体的な教育の振興計画が明示されました。私学振興が謳われているとは言え、少子化等の影響により、今日の私学を取り巻く社会経済環境と政治風土は厳しく、国公立と私学そして私学同士の生き残りを賭けた競争は熾烈を極めております。

これに加え、3・11東日本大震災からの復旧・復興という大きな課題を新たに負うことになりました。地域の復旧・復興のために、人的・物的資源の積極的活用を図るとともに、被災学生への経済的支援は継続的に行なう必要があります。不幸な被災結果を招いた一因として正常性バイアス(normalcy bias)（「自分は大丈夫だ」という心理状態）が話題になりましたが、財政運営においても、常に危機意識をもち「正常性バイアス」を脱して、強固な「自立心」を以って難局に立ち向かう必要があります。

私が「希望」というのは、隣接した東北大学片平校地南地区の土地取得に関係します。すでにお知らせした通り、一時震災の影響で東北大側の一方的都合から白紙撤回された土地交渉は、震災からの復旧・復興計画が進展する中で、一部の購入が可能となりました。当初の七分の一という狭い範囲になったのは残念ではありますが、東北学院大学にとって二つの大きな意味を持ちます。一つは、片平南地区土地売却が他のライバル校への売却の可能性はほぼなくなったこと、もう一つは東北学院大学の将来計画を具体的に描くことができるようになったことです。希望があります。

今土樋キャンパスは、狭隘なキャンパスであることと老朽化した建物の不適格建物を有しているので建て替えも困難という二つの課題を抱えています。土地のゆとりができれば、

これらは一気に解決します。同一学部同一キャンパスの一部実現も考えられます。多賀城キャンパスも老朽化した建物を抱えています。隣接・近接土地の購入によって、新たな総合的な大学キャンパス構想計画が可能になります。受験生や地域に魅力あるキャンパスとより便利なキャンパス・アクセスを提供できる希望があります。希望をもって教育と宣教の使命を果たして行きたいと願っております。⁴⁾

このような使命感へと私を突き動かしているのは、先達たちの信仰の言葉や人間信頼の言葉であります。いくつか引用して共有できることを願い、発題の結びとしたいと思います。

(9) ローマの信徒への手紙、第5章3－5節

³そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、⁴忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。⁵希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

(10) 『老子』第5章

天地不仁、万物を以て芻狗と為す。聖人は不仁、百姓を以て芻狗と為す。

(Heaven and earth is impartial;

They see the ten thousand things as straw dogs.

The wise are impartial;

They see the people as straw dogs.)

(Universe is impartial and without self. It treats all things equally. It treats all things like sacrificial straw dogs, showing neither like nor dislike for them. A sage is also impartial and without self, treating all the subjects like straw dogs to whom he shows neither like or dislike. All are equal in his eyes.)

(11) 『老子』第58章

禍は福の倚る所。福は禍の伏す所。たれかその極を知らん。

(Happiness is rooted in misery.

Misery lurks beneath happiness.

Who knows what the future holds?)

(What one regards as calamity is often fortune under disguise. What one regards as fortune is often a cause of calamity. Who knows what the final outcome will be.)

(12) コヘレトの言葉、第1章2節

コヘレトは言う。

なんとという空しさ

なんとという空しさ、すべてはむなし。

Vanity of vanities, saith the Preacher, vanity of vanities; all is vanity.

(9)は多くの方が座右の銘としているものです。私自身には、高校2年の時に肺結核で1年3ヶ月入院自宅療養をし、高校を休学した時に与えられた励ましの御言葉です。震災後は尚一層私を勇気付けているものです。

(10)は昨年8月のキリスト教学校同盟東北北海道地区大学部門研究会発題の中でも引用したものです。英文翻訳が意味解釈となり得るので、異なった翻訳二種類をつけ加えておきました。(11)も同じく『老子』からの引用で、ここにも英文翻訳を二つつけました。私には、これら(10)と(11)は(12)の御言葉に対応していると思えます。

今ある「あるがまま」を受容して、神への信頼の祈りを今ほど求められている時代はないと思います。希望は消極的なマイナスの「呪い」の祈りからではなく、積極的なポジティブな「祝い」の祈りから生まれるものと信じております。「ダメだ」「ダメだ」と言っても駄目で、「ダイジョウブ、ダイジョウブ」と自らを慰撫していても駄目で、「あるがまま」を受容することです。老子の言葉によれば、「聖人は不仁、百姓を以て芻狗と為す」であり、「禍は福の倚る所。福は禍の伏す所」であります。そして、それは「空の空、空の空、一切は空」でもあります。一切を神に委ね、「無」や「虚」、「無心」からの出発であります。ここを出発点として「あたたかい心があたたかい行為になり」「やさしい思いがやさしい行為になり」、心も思いも初めて美しく生き、そこで人が人として生きることができるようになることから、希望が生まれると私は信じております。言行一致の幸せ感がここに生まれます。

建学の精神としての「思い」や「心」、或いは、未だ言葉に留まっているものを「見える化」し「具体化」することについて今考えていることの一部を紹介させていただきました。

御清聴有難うございました。

注

1) 宮澤章二、『行為の意味—青春前期のきみたちに』、株式会社ごま書房新社、2010。

これを宮澤賢治作と、東北学院大学2011年『大学礼拝』クリスマス特集号チャペルニュース第119号「私がさびしいときに」の中で紹介してしまいましたが、誤りです。訂正し、お詫びいたします。

- 2) E・キュープラー・ロス、『死ぬ瞬間—死とその過程について』、中公文庫、2001。
_____『死、それは成長の最終段階—続死ぬ瞬間』、中公文庫、2001。
V・E・フランクル、『それでも人生にイエスと言う』、春秋社、1993。
- 3) 東北学院大学、『大学礼拝説教集第16号』、アクトジャパン、2012。
- 4) 以下の結びについては、当日、時間の制約から、はしょった部分ではありますが、発題の後の質疑応答で伝えたものでもあるので、準備していた草稿そのままに掲載させていただきました。

2012 年度
第 38 回 サマーカレッジ

第37回サマー・カレッジプログラム

主題：「ボランティア活動」

場所：宮城蔵王ロイヤルホテル

時間	8月10日 (水)	8月11日 (木)	8月12日 (金)	時間
7				7
8		朝 食		8
9		朝の祈り (8:30) チェックアウト		9
10		ワーキングホリデー 「会場：(有)グリーンアトリエ ひらきゆう」 野菜の手入れ作業	「講演Ⅱ」 「ボランティア活動の実際」 北 博 大学宗教主任 質疑応答 司会 原田先生	10
11			「学生たちの発題」 「ボランティアについて語る」	11
			アンケート記入	11:30
12			閉会礼拝 野村 信先生	12
13	学生集合13:15(土樋) 開会礼拝(学生) プログラム(13:30)	昼 食	昼 食	13
14	「講演Ⅰ」 「ボランティアについて」 講師：共生社会経済学科 阿部重樹先生	野菜の手入れ作業	解散「送迎バス」	14
15		準備		15
16	土樋出発「送迎バス」	レクリエーション ソフトボール、他		16
17	ホテル到着			17
18	オリエンテーション			18
19	夕食	夕食		19
20	フレンドシップ (親睦のひとつとき)	演奏・賛美の時 学生有志		20
21	祈りの夕べ	祈りの夕べ		21

※プログラムが一部変更になることもあります。

第36回 サマー・カレッジプログラム 講演Ⅰ

「東北学院大学の災害ボランティア活動への取り組み」

—東北学院大学災害ボランティアステーションの体験から—

共生社会経済学科 阿部 重樹

1. はじめに

周知のように、東日本大震災からの復興、復旧には多様な共助の組織・団体が関わってきている。そうした中で、東日本大震災における災害ボランティアの活動と貢献についても大きく評価されてきているところであろう。その果たしてきた役割と存在については、ある人々の表現を借りれば、それは「ボランティア・バブル」とも言われるほどに、大きなものがあつた。大学生を中心とする学生ボランティアもまた、特に東日本大震災発災直後の初期の復旧過程においては特筆されるべき活躍を見せてくれた。

震災発災後から5月の大型連休明けあたりまで、遅くとも5月の中旬頃までの災害ボランティアが対応したニーズとして、大きな津波被害があつた地域を中心としながら、瓦礫や汚泥の処理が特に優先されなければならない短期的、緊急的な課題が象徴的に存在していた。また、この瓦礫、汚泥処理と同様に、避難所における多様な支援が主要なニーズとして把握されていた。しかし、その後ボランティアのニーズのあり方をめぐっては、局面の変化ということをよく耳にするようになった。

こうしたニーズをめぐる議論を始めとして、その要因については本稿での後の検討課題の一つとなるが、マスコミによる報道にも見られるように、昨年5月の大型連休明けを一つの境としながら、被災地で活動をする、また復興支援に係わる災害ボランティアは急激に減少を示し始め、その後復調の兆しを見せることがないままに今日に至っているといえよう¹⁾。

ところで、私の勤務する東北学院大学では、昨年の3月29日に災害ボランティアステーションがその活動を開始した。東北学院大学では、東日本大震災が起こる前年から本学学生のボランティア活動の拠点を学内に設置することについての検討が行われていたものの、それ以前には大学としてのボランティア活動への取り組みについては、こうした拠点施設(センター)に関わる運営とともに実践的な活動体験を持たないでいた。こうした経緯の下で、大学自身もかなりの被害を受け、また人々の日常生活も相当程度制約を受けて

いたという当時の被災状況の中であって、大震災発災後わずか2週間程度の時期において災害ボランティア活動の拠点となる施設と組織を立ち上げたということになる。こうしたことから、当然にステーションの組織と運営体制の確立については多くの戸惑いと苦勞があったということも一つの確かな事実であろう。しかしそれにもかかわらず、今多少の自負を込めて述べることを許してもらえらば、少なくとも5月の大型連休明けの時期あたりまでは、本学学生の災害ボランティアに関わるマッチングやコーディネーションに関して、決して十分であったとは言えないまでも、それなりの成果と実績を順調に積み上げることができていたのではないかとの思いがある。

この時期におけるこうした精力的な活動の一つの副産物として、その後の全国の14の大学が参加しての大学間連携による災害ボランティア活動への取り組みがあり、とりわけ夏期休暇中に気仙沼地域をフィールドとして集中的な災害ボランティア活動が行われた²⁾。

とは言え、他方では東北学院大学災害ボランティアステーションをめぐる災害ボランティア活動の動向と現状についても、上に述べてきたことと全く同様の状況を辿っているとの指摘をすることができよう。

そして、災害ボランティアをめぐる現状はといえば、先に紹介をした「ボランティア・パブル」は早くも「弾けた」感の様相を呈し始めているように思われてならない。もちろん、だからと言って、今後とも震災からの復旧、復興の過程で災害ボランティアに求められているニーズはまだまだ大きいことは承知してのことである。

以上のわれわれの議論に関連して、NPO法人遠野まごころネット理事長多田一彦氏が毎日新聞への寄稿「これが言いたい」「ボランティアは今こそ現地に」の中で、次のように述べられているところを紹介しておきたい。すなわち、『『まだボランティアは必要ですか』。こんな質問が今年の夏過ぎから少しずつ増えてきた。初めは情けなくて答える気にもならなかった。

でもこれが日本の現実であり、答えるのが我々の役目だと思直した。(中略)

(中略)これからはますます伝えることが難しくなるだろう。伝えるべき者が現状をしっかりと捉えきれていないことすらあるからだ。

(中略)

今、我々は『被災地』という言葉のできる限り使わず『現地』と呼んでいる。ここは出口が見つからずさまよいつける日本の最前線、そして開拓の地と考えるからだ。現地には今の日本が抱えるさまざまな問題や課題が凝縮されて存在している。(中略)

今、現地は復興に向け頑張っている。ニーズは次第にハッキリしてきている。だから個人も企業もその気になればいろいろなサポートが可能だ。」³⁾と。

加えて、今後予想される大規模災害への支援や人口減少・少子超高齢化が進展する下

での地域社会における「安全で安心な」まちづくりをも射程におさめるならば、「ボランティア・バブル」を体験したこの好機においてこそ、ボランティアの新しいステージにおける活性化や組織化に眼差しを向けるその意義と必要性は何時にもまして高まっているといえよう。

本稿では、以上に述べてきたような問題意識を最深部に据えながら、大学災害ボランティアステーションの立ち上げとその後の運営にかかわるといふ私のささやかな体験を通して、大学における災害ボランティア活動への取り組みにおける意義とそこに指摘される問題を直接的な検討課題とする。併せてそこでの考察を踏まえた上で、災害ボランティア活動のさらなる活性化に向けて、その中核的なポイントとなるであろうボランティアコーディネーターの養成の必要性について述べることにしたい。

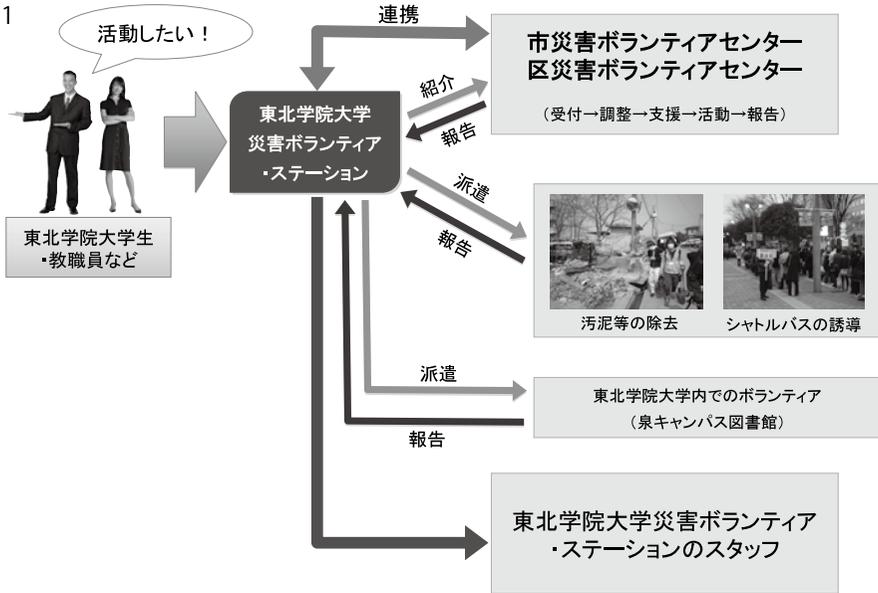
2. こうして東北学院大学災害ボランティアステーションの活動は始まった

最初に災害ボランティアステーションが昨年5月の連休明けまでの設立当初の時期においてどのように組織、運営され、そしてどのような活動を行なってきたのかについて、簡単に紹介をすることから、東日本大震災におけるこれまでの災害ボランティア活動の現状とそこに指摘される課題についての検討を始めることにしたい⁴⁾。

上にも触れたように、本学の災害ボランティアステーションは、慌ただしい中、ごく短期間のうちに立ち上げられて、活動を始めることになった。記憶に誤りがなければ、昨年3月29日(月)の前週のいずれかの日に、学長室長佐々木俊三教授より学長室副室長郭基煥准教授、学長室事務課職員スタッフと私に近々に災害ボランティア活動の拠点なるものを学内に設置したいとの意向が示されて、相応の準備のための検討に着手して欲しいとの話しがあったという覚えがある。私の場合は、郭准教授とともに青山学院大学からの学生ボランティアの派遣と支援物資の受け入れに対応してきており、こうした経緯からこのことに関与することになった。また、この時点では災害ボランティアステーション⁵⁾という名称も定まっていなかった。こうして、3月29日の朝に学生、院生を含む8名の教職員が集まり、当時の学内外の状況から、当分の間は新年度の授業開始の目途もたないであろうという展望を踏まえて、当面は非常勤講師控室を災害ボランティアステーションとすることで、その運営と活動が始まった。

さて、既に3月29日の時点で、本学災害ボランティアステーションについては図表1に示されるようなスキーム⁶⁾のもとでの活動が考えられていた。

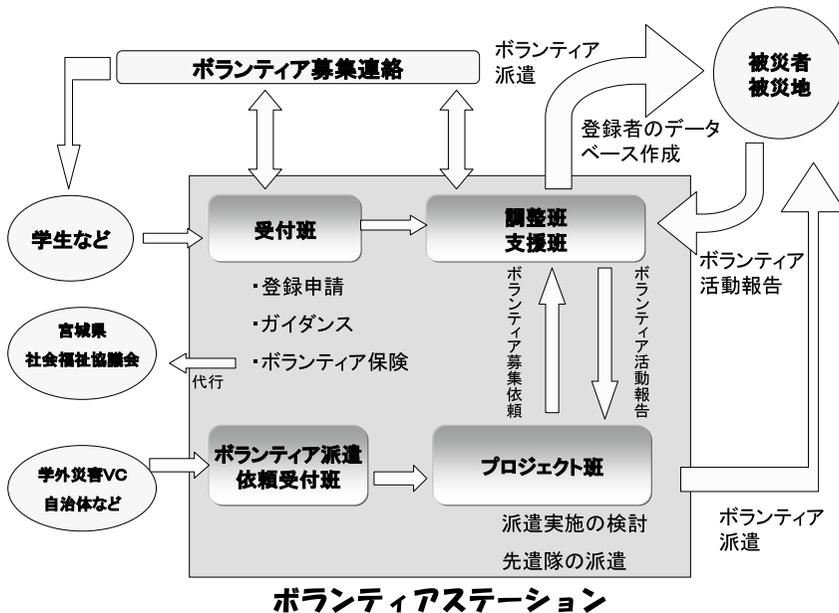
図表 1



こうしたスキームが考えられたその背景について、若干の説明を加えておこなうならば、①東日本大震災の発災後、特に仙台市社会福祉協議会と本学の間では、学長室を中心として幾つかの事柄において平時にもまして積極的な交流がもたれていたこと、②一般的には、当時の県内の災害ボランティア活動が各地に設置された災害ボランティアセンターのコーディネーションのもとに行われていたという状況があったこと、③上に述べてきたような経緯から、すぐには本学ボランティアステーションが直接的に災害ボランティアをコーディネートする能力と余裕を持ち得ないであろうと考えていたこと、等の事情があった。

次に、図表 2 は、災害ボランティアステーションの組織運営体制を示したものである。

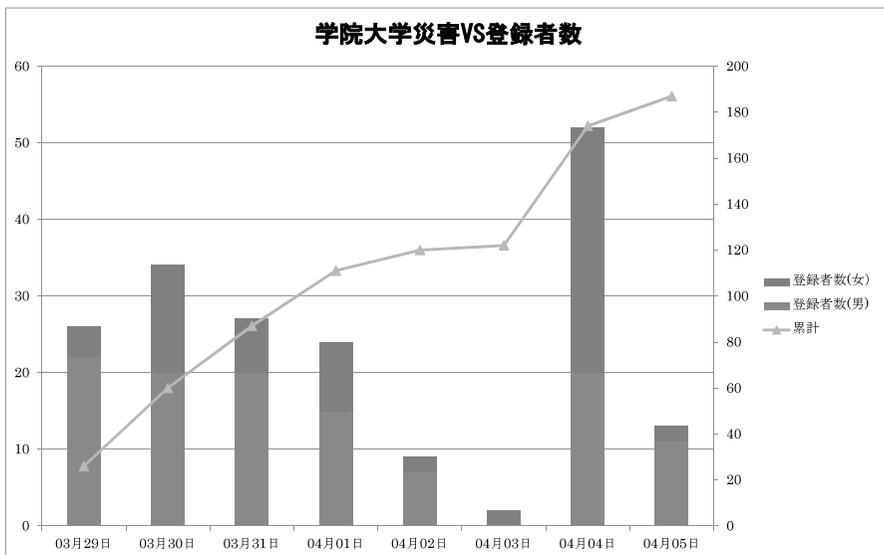
図表 2



とというものの、当初は、ある意味では当然のことながら、このチャート図に示されるような整えられた体制⁷⁾のもとに本学の災害ボランティアステーションが実際に運営され、ボランティア活動による災害支援が行われるようになるまでにはいましばらくの時間が必要であろうと想定していたところであった。しかしながら実際には、設置されて1週間以内には、ほぼこの図に示される運営体制において本学ボランティアステーションは災害ボランティア活動を行うこととなった。すなわち、ここで注意をしておかなければならないのは、図表2の中に示されているように、上に述べたように活動を始める以前に考えていた想定とは異なり、各地域の災害ボランティアセンターとの連携を図りながら、本学の災害ボランティアステーションが災害ボランティア活動のプログラムを策定し、直接的なマッチングを設置後すぐに始めていたという点についてである。また他方では、運営と活動は図表2のチャート図のように展開されていったが、その組織体制までもが同時並行的に整えられていたという訳ではなかったという点を投稿しておかなければならない。そのため、当時の災害ボランティアステーションの運営と活動を支えた教職員スタッフと学生スタッフボランティアの担わなければならなかった負担と努力は一層大きなものにならざるを得なかった。

図表3は、3月29日(月)から4月5日(月)までの1週間の本学災害ボランティアステーションでボランティア登録をした学生数を示している。同様にまた、図表4は、5月の連休明けの時期までの期間で、災害ボランティアステーションに登録をした本学学生が実際にどのような災害ボランティア活動に参加したのかを整理したものである。この図表3の登録学生数の動向とともに、図表4にも当時の本学災害ボランティアステーションの災害ボランティア活動への取り組みの状況が表されていよう。

図表3



図表 4

ボランティア活動状況

瓦礫・汚泥 処理等	石巻派遣(学生)	(教職員)	七郷派遣(学生)	(教職員)	
	118	34	71	17	
	亙理派遣(学生)	(教職員)	塩竈倉庫(学生)	(教職員)	
	44	12	68	5	
	塩竈引越し(学生)	(教職員)	名取(学生)	(教職員)	小計
	24	9	46	12	460
教育的ボラ	雄勝(教育ボラ)(学生)	(教職員)	翻訳ボラ(学生)	(教職員)	小計
	36	20	70	5	130
学内復興 関連	図書館派遣(学生)	学内ボラ	押木先生(学生)		小計
	20	3	3		26
子どもの相手 その他	こども祭り(学生)	(教職員)	多賀城絵本(学生)	(教職員)	
	7	1	31	6	
	サッカーボラ(学生)	(教職員)	多賀城バス(学生)	(教職員)	小計
	5	2	48	2	102
継続的ボラ・ スタッフボラ	肩もみ(学生)	情報ボラ	本部スタッフ		小計
	28	74	169		271
					合計
					990

3. 大学による災害ボランティアへの取り組み

そもそもボランティア活動にあってはその意義などを考える必要があるのかという点をめぐっては、ある種の違和感を持たれることも十分に有り得ることであろう。そこで、われわれがこの問題を取り上げようとする際の、その背景にある問題意識、現状認識から述べることにしたい。

ところで、上に述べてきたような本学災害ボランティアステーションの立ち上げにかかわる時期においてわれわれが感じた大変さは、震災から1年が経過した時点で振り返ってみてみるならば、その後の震災からの復旧・復興へのボランティア活動による支援にとってはまだほんの始まりに過ぎなかったように思われる。いずれにしても、大学生の災害ボランティア活動を支援するという点、ここで取り上げている問題意識からいえば災害ボランティアステーションを設立し、運営するという点については、実際に被災地、被災者の支援に参加する当の大学生にとってはもちろんのことであるが、これに係わる教職員にとっても、大学それ自身にとってもかなりの負担を背負うことになった。そして、この“負担感”的なものについては、時間の経過とともにそれが徐々に大きくなってきているという事実があることもまた否定のできない一面であるように思われる。特に今後の復興の道よりも未だ遠く、災害ボランティアにもその支援の継続性が求められるという状況の中にあっては、災害ボランティア活動を継続していくことにあたっての誘因(インセンティブ)

ないしはモチベーション(動機)に係わるそれぞれにとっての説得的な論拠が存在していることが、状況と場合によっては必要になるであろうと考えている。また、その際に、この災害ボランティア活動の意義が誰にとって語られているものであるのか、そしてそれがどのような文脈において語られているのかという点に十分な注意が向けられていることが肝要である。

以上のことを踏まえて、大学が災害ボランティア活動に取り組む拠点施設(東北学院大学の場合には災害ボランティアステーションとなる)を大学内に置くことの意義について、われわれの体験をもとに以下に整理をしてみたい。

先ず挙げられなければならないのは、当然のことではあるが、被災地域、被災者の復旧、復興支援へのボランティア活動を通じての貢献であろう。

次に、学生にとってはどうであったろうか。復旧、復興支援への貢献という点に加えて、未曾有の大震災が発生した時期に、被災地域の大学において大学生時代を過ごす学生にとって、今後の学内での学びにとって現場を体験し、知ることの意義は決して小さいものではなかったと考えている。教職員と一体となっておおよそ一日完結型でのボランティア活動(プログラム)を体験しながら、「行って、見て、聞いて、話して、感じてそして考える」というまさにフィールドワーク(実地体験型学習)が実践される機会となった。因みに、大学生時代におけるキャリア形成において、パラレルキャリアとしてまったく異質の価値観をもつボランティア活動へ継続的に参加する契機となった場合も見受けられた。

大学にとっては、災害ボランティア活動に組織的に取り組むことにおいて、何がその意義、魅力になり得るのであるだろうか。上に述べたように、学生たちの学びと成長が多様な形で一層促されるボランティア活動という、大学での学びにとっての新しいフィールドの広がりとその可能性を実感させられたことが大きな収穫であったと考えている。このボランティア活動という「学び」におけるテーマは、同時に大学の地域貢献にとっても有力なフィールドとなっていよう⁸⁾。この点をめぐって付言するならば、あくまでこの度の体験を「結果的に見た場合に」という注釈付きであるのだが、大学の社会的プレゼンスをさらに大きくすることにも繋がっていたという側面も否定できないように思われる。

こうしたことから、以上の点を踏まえた上で、「地学連携」というビジョンを、今後より具体的にどのように重層的・立体的に大学での学びの中に展開していくのかということが次のステージにおける課題として問いかけてられているものと考えられる。

4. 大学による災害ボランティア活動の抱える課題

災害ボランティアをめぐる課題については、東日本大震災以降に限ただけでも既にさ

さまざまな側面において多様な指摘がなされてきていることは承知している。

こうした状況を踏まえた上で、本節でのわれわれの関心の焦点は、東日本大震災が発生した3月11日以降からおおよそ5月の連休明けまでの期間に相当程度の活躍を見せた大学生による災害ボランティア活動がその後急速に活力を失い始め、趨勢としても勢いを失ったまま、今日まで依然として低調なままにあることに向けられている。この問題意識のもとに、次に大学生による災害ボランティア活動が活性化の様相をなかなか取り戻せないでいることの背景的要因について、本学災害ボランティアステーションでの活動体験の中から探ってみることにしたい。なお、今日的な災害ボランティア活動の低調さについては、それを一義的に説明できるとは考えていないという点に注意をしておく必要がある。すなわち、以下での議論もそうしたものの一つであるように、発災後の時間的経過の中で、地域の違いによっても、また災害ボランティアの活動するテーマや分野によっても異なるその時々状況において、それぞれに相違した幾つかの背景的、直接的要因が相互に影響を及ぼし合いながら、災害ボランティア活動の展開に関わっての困難性を生起させていると考えている。このように理解しようとする点については、東日本大震災では被災地域が余りに広範囲にわたっており、そのそれぞれの地域ごとに被災(被害)の状況は大きく様相を異にし、またその程度にも大きな格差が生じているという現実を踏まえてのことである。さらに、発災からの時間の経過が被災状況の変化をもたらし、このこともまた問題をより複雑にしている。

さて、本稿では、大学による災害ボランティア活動への取り組み、大学生による災害ボランティア活動の展開を困難なものとしている要因(課題)を、①ボランティアの持続的で安定的な確保の問題、②災害ボランティアニーズ、③災害ボランティア活動のコーディネーションという3つの視点から次に整理をしてみたい。

先ず、①のボランティアに参加する学生の持続的で安定的な確保が困難になってきていることについてである。そもそもボランティアとはそれが自発性にもとづく行為であることが大前提となっている。このことを考えれば、ボランティアについて何かを論じようとする際に、ここでのこうした立論の視点そのものが、議論を行う以前の問題として、何かしらの違和感なり疑問を抱かせることになる可能性をもつものであることについては十分に理解をしている。この点についてどのように考えるのかという点をめぐっての検討から、議論を始めることにしたい。すなわち、われわれもまたボランティア活動においてはその自発性が尊重されているのでなければならぬということは理解している。その一方でまた、復興にかかわっての災害ボランティアをめぐるいわゆる需給のミスマッチが大きくなってきており、今後も時間の経過の中でこの需給のミスマッチのさらなる拡大化が予想されるという事態にも対応を求められている。こうした現状認識に立つならば、大学生に

よるボランティア活動を促進するための何かしらの誘引が施策的にも、運営上においても配慮(工夫)される必要性が大きくなっているものと考えられる。そしてその際に、こうした誘引を利用するかどうかについての選択の自由(余地)が、災害ボランティア活動に参加する大学生一人ひとりにとって認められていること。そして、そのような運用上の対応が考慮されていることが重要な点になるものと考えられる。

さて、災害ボランティア活動に参加する学生が減少してきているという現状をめぐっては、その最たる要因には、やはり大学生のボランティア熱が醒めてきていることや災害ボランティア活動へのモチベーションの低下が挙げられよう。昨年の5月の大型連休明け以降に低下を示し始め、その後一度も復調を見せていないという災害ボランティアに参加する学生数の動向もまた、このことを如実に示しているものと思われる。すなわち、他の多くの大学と同様に、東北学院大学もまた昨年度の新学期は5月に入ってから始まっている。このことにより、実際問題として、授業やサークル活動が、あるいはアルバイトも含めての平常時の学生生活が始まり、災害ボランティアに参加するにあたっての時間的制約を受けられるようになったということももちろん指摘され得よう。しかし、問題はこのことにとどまらない。大学が新学期を始めることが可能であるという判断をしたということは、単にキャンパス内の施設等の復旧とその安全性が確認されたということばかりでなく、通学をはじめとしてその他諸々の点において、学生が学生生活という日常を過ごすための通常性が社会環境の中に担保されているという認識がそこにはあったということである。学生たちに一刻も早く平常時の大学生活をという側面というならば、このことは間違いなく望ましいことであった。しかしまた同時に、意図せざる結果として、次に述べるような災害ボランティア活動にとっての複雑な状況を惹起したのではないかとと思われる。被災地に所在するという事実を紛れもなくつ東北学院大学においてさえ、仙台市の中心部に所在する土樋キャンパスもまたそうであるように昨年の5月以降時間の経過とともに3月11日に発生した東日本大震災からの復旧は既になされたという感覚や思いにしばしばとらわれてしまう。それほど震災前のキャンパスライフがそのまま再現してしまっているという、大学の内外における社会環境的な要因こそ、この問題を理解しようとする際にはより重要な要素になっているのではないかと考えている。すなわち、本来であるならば、大学が新学期を迎えたことで、災害ボランティア活動をさらに積極的に展開するための環境が整えられたとも見ることができる一方で、そのことがまた災害ボランティアに参加しようとする大学生の減少をもたらすことになっているということなのである。

以上の大学生の災害ボランティアへのモチベーションの低下をめぐる議論に関連して、平野博文文部科学大臣が被災地での教育の実情を視察するため、4月8日に福島大学を訪れた際にあつたとされる災害ボランティア活動の単位化への言及についても付言をしてお

きたい。報道によれば、「平野大臣は視察のあと記者団に対し、『学生ボランティアは非常によくやっていると感動した。被災地の拠点大学としてどうあるべきかを考えるなかで、こうした復興支援にはぜひ取り組んでいただきたい』と述べました。そのうえで、平野大臣は『被災者支援の活動は、単純にボランティアに終わるのではなく、カリキュラムに取り入れてもらいたい。文部科学省としてもできるだけ支援をしたい』と述べ、被災地の大学では、復興支援のボランティア活動をカリキュラムに取り入れ、単位として認定することが望ましいという考えを示しました⁹⁾ という内容が伝えられている。

これまでのわれわれの議論を踏まえるならば、被災地に所在する大学にあっては、「被災地の拠点大学としてどうあるべきかを考えるなかで、こうした復興支援」や「被災者支援の活動」に今後とも継続的に取り組んでいくのだというメッセージを積極的に発信して欲しいという内容で、またその程度、範囲において、ここでの平野文部科学大臣の発言の趣旨を理解することが妥当であるように思われる。可能であればもちろん何らかの「被災者支援の活動」とともにというのが望ましいことであるのはいうまでもない。がしかし、他方では間違いなく、少なくともこうしたメッセージを多様な機会を通じて発信し続けることは、大学生のボランティア活動へのモチベーションを強めるという意図をもつだけでなく、当該大学における災害ボランティア活動へのスタンス、その意義の評価のあり方をめぐる表明とも密接に関連をもつものとなっているはずである。また、このような平野文部科学大臣の発言の趣旨にかかわるわれわれ理解のあり方の妥当性については、一口にボランティア活動の単位化と言われる事柄が、その実体化としてのカリキュラムへの取り入れをめぐる、実際問題としては多様な問題を内包しているという側面を指摘し得るといふ点からも補強されることになるであろう。この点に関しては、後に災害ボランティアのプログラムの策定にかかわる難しさのところでも再度論じられることとなる。

次に、②の災害ボランティアのニーズの変化についての検討を行う。

東日本大震災では、周知のように被災地域が相当に広範囲に及んでいることから、先ずは地域ごとに被災(被害)の状況に大きな格差が生じているということがある。これに加えて、同じ地域内にあっても、地震による被害のみを受けた地域と被害が津波による地域では、被災状況が全く異ってきている。そして、発災から1年という時間の経過のなかで、被災状況もまた、復興の進捗状況に対応をしながら、各地におけるその有り様はさらに多様なものとなっている。こうした中において、災害ボランティアニーズもまたその多様性に時間の経過に伴う変化が複合化して出現してきており、災害ボランティアのコーディネーションの難しくなっているように思われる。

ここでも、東日本大震災発生からゴールデンウィークと言われる大型連休が終わる5月上旬までと、それ以降の時期との対比において、災害ボランティアニーズの特徴について

整理をしてみたい。こうした検討作業を通じて、多様性と変化が複合化する災害ボランティアニーズと呼ぶところのものについて述べてみることにする。

3月11日の東日本大震災の発災から5月の大型連休明けあたりまででは、災害ボランティア活動にとってのニーズの特徴は、早急に対応が求められる点にあった。ニーズは短期的に解決・改善されなければならない課題として存在をしていたのであった。また、もちろん東日本大震災は非常に広域的に被害を及ぼしたが、例えばこの時期における代表的なニーズの一例として挙げられる瓦礫や汚泥の除去・処理や避難所への支援に見られるように、一つひとつのニーズが所在しているのは、地域内においては局地的で、限定的なものであった。また、そこに行けばニーズが見えるという意味は、顕在的であったともいえよう。そして、この時期においても災害ボランティアが対応した活動内容は多種多様なものではあったものの、それでもこれ以降の時期との比較において言えば、類型化が比較的容易であり、また大規模なニーズが多かったといえよう。これらのことから、先ずは、これまではボランティア活動に関心を持たないできていた大学生にあっても、参加するに際して、その活動内容について、少なくとも何らかのイメージを持ちやすかったのではないかと思量される。また、ニーズをめぐるここでのこうした議論は、東北学院大学災害ボランティアステーションにおいて当時行なわれたボランティアコーディネーションの方がむしろ現在と比較してある意味では相対的に容易に行うことが出来たのではないかという感覚にしばしばとらわれるということにも関連があるようにも思われる。また、以上の議論をめぐるのは、もちろんこうした時期区分に従って、ニーズの質的变化が厳密にそして明確に起こった訳ではないという点については注意をしておきたい。因みに、ここで説明のために例示的に取り上げた瓦礫や汚泥の処理については、2012年の5月の時点においても、その依頼件数は多くないものの災害ボランティア要請(ニーズ)の一つとなっている。

この時期におけるニーズを上記述べたように東日本大震災発災の初期におけるものとして捉えるならば、その後の災害ボランティアニーズについては、その特徴を次のように整理し、把握することができるように思われる。第一に、求められている課題の解決・改善に要する時間でいうならば、災害ボランティア活動の内容は、中・長期的なニーズに対応するものになってきている。この時期におけるニーズの特徴を示す例としては、借上げ民間賃貸住宅での避難生活者への支援を挙げることができる。なお、仙台市においては、応急仮設住宅に入居し、避難生活を送る世帯の総数に対する借上げ民間賃貸住宅の世帯数はおよそその8割に達する9,913世帯となっている(平成24年2月6日現在、「応急仮設住宅の現況調査と就労に関する意識調査(仙台市復興事業局生活支援室・仮設住宅室)」による)。こうした借上げ民間賃貸住宅での避難生活者への情報や支援提供については、周知のようにプレハブ仮設住宅に比して大きく遅れており、大きな支援課題となっている。この

借上げ民間賃貸住宅での避難生活者への支援に見られるように、災害ボランティアニーズの所在は拡散化しており、地域に散在することに伴い、潜在化する様相を呈している。そして、仮設住宅への避難生活を余儀なくされているという要素がさまざまな形で影響を与えているという側面は見逃せない事実としてあるが、いずれにしても日常生活に係わっての多様で、継続的なニーズの充足が仮設住宅への支援には求められている。

さて、東日本大震災の発災直後から5月の大型連休明け辺りまでの時期における災害ボランティアにとってのニーズの特徴について何がしかを語ろうとする時に、われわれはしばしば、川内康範氏による正義の覆面ヒーローが活躍する「月光仮面」の主題歌の歌詞を重ね合わせてしまう。すなわち、学生ボランティアの一人ひとりについては、「どこの誰かは知らないけれど」、災害ボランティアだということは「誰もがみんな知っている」。災害ボランティアで被災地、被災者を訪れた大学生は、「正義の味方よ よい人よ 疾風のように現れて 疾風のように去っていく」というようにである。自分が参加しようとしているボランティア活動の意義については、当時の社会的風潮が強い追い風(背景的要因)となって理解し易いものがあったであろうことは想像に難くない。さらに匿名性のもとに、そのひと時を一生懸命にという一時的な参加を志向するという意味においても、いわれているところの現代の若者の気質や性向とも合致しており、一般的に災害ボランティア活動への参加のハードル(心理的抵抗感)が一層低くなっていたのではないかと考えられる。しかし、それ以降の時期においては、ニーズの変化に対応しながら、求められている災害ボランティア活動は、もちろん依然として上にいう「月光仮面」型のものもあるものの、援助関係におけるいわゆるラポール(信頼関係)に基づいて、継続的に多種多様な日常生活支援を地道に提供するタイプのものにその主流が移りつつある。こうした理解のあり方がいま許されるとするならば、日常生活支援ということからの当然の帰結として、信頼関係の構築に基づいての継続的な支援に関わるという点において、ボランティア活動の一つひとつの具体的な内容も細やかに落ち着いたものとなり、どちらかといえばチームで対応するというよりも個人ないしは2人程度で対応する内容のものとなり、災害ボランティア活動へ向かおうとする際に、大学生にとってのそのハードルは総体的に高いものになってきているのではないかと考えられよう。

災害ボランティアのニーズをめぐる以上の議論に加えて、被災者・被災地への関心が薄れつつあるという社会的風潮が主な背景的要因となって、災害ボランティア活動の意義が一人ひとりの大学生にとって見えにくくなっていることもあり、災害ボランティア活動への参加のモチベーションのもたらされていると理解される。こうしたことから、既に述べたようにボランティアの持続的で安定的な確保が東北学院大学の災害ボランティアステーションにおいても大きな課題となっているのであるが、これと密接な関連性を有する災害

ボランティア活動のコーディネーションの問題を次に取り上げてみたい。

ところで、この議論を始めるにあたっては、災害ボランティアもボランティアであることを考えれば、一般論としては、ニーズがあるのであれば、取り敢えず被災地、被災者のところへ駆けつけて、支援活動を行えば良いのではないかとされる点に先ず注意が向けられる必要があろう。事柄の一面としては、まさにその通りであって、そうであるからこそ各被災地域にはそれぞれにさまざまなボランティアを受け入れ、コーディネーションを行なっている団体、組織が存在しているとも言えよう。しかし、ここでわれわれが議論をしてきているのは、大学という教育機関の中に設置されている拠点におけるそれについての問題であるということである。大学自らが組織的に災害ボランティア活動へより積極的に取り組むことについては、そのような社会的要請が既に存在しているということについては言うまでもない。その上で、その意義については、既に述べてきているところである。

さて、被災地におけるニーズに、被災者が抱えるニーズに災害ボランティアによる支援を結びつけることは、災害ボランティア募集の紹介なり通知をすればマッチングがなされたというほどには簡単ではない。この点に関しては、例えば、災害ボランティア活動に参加する大学生をどのように持続的に、安定的に確保できるのかということも、現状では大きな課題の一つとなっているということもまたそうである。

また、東北学院大学の災害ボランティアステーションが外部の団体、組織からの災害ボランティアの募集についての依頼を引き受けるにあたってでさえ、本学に在籍する学生が災害ボランティア活動に参加するという点を考慮して、しかるべき団体、組織からのしかるべき内容をもつものと判断された場合に限って紹介を行うよう配慮がなされている。

これとは別に、災害ボランティアステーションが外部の団体や組織から直接的にボランティアの派遣要請を受ける場合もある。あるいは、災害ボランティアステーション自らがニーズへの対応の必要性を認識して、積極的に、主体的にボランティアによる支援に取り組もうとする場合もある。このような場合には、他のこうしたコーディネーションを行おうとするセンター的機能を有する拠点施設と同様に、ボランティア活動の内容、それに伴う備品や機材の準備、対応した研修・養成、注意の喚起などを含むいわゆるボランティアプログラムの検討が求められることになる。東日本大震災での災害ボランティア活動における後方支援に係わる課題としてよく知られている、現地までの災害ボランティアの移動についての対応、配慮などもその一例である。このプログラムの検討の過程では、教育機関としての災害ボランティア活動への取り組みという点から、支援を受ける方々へ配慮についてはもちろんのこととして、特に災害ボランティア活動に参加する学生の安全と安心を可能な限り担保し、リスクを回避することには相当程度の多様で繊細な対応が求められることになる。加えて、災害ボランティア活動の意義においても述べてきているように、災

害ボランティアに参加する学生の学びと成長を促すことを意図して、活動の前後における教育的配慮をどう工夫するのかという本質的な問題¹⁰⁾や日常の授業への支障がでないようにすることなどへの対応などもまた要請されてくる。このように特にプログラムの開発を中心とするボランティア活動に関わるコーディネーションのあり方は、大学における災害ボランティア活動への取り組みとその内容を大きく左右するほどの大きな課題の一つになっている。そして、ここに述べたような課題を扱うことになるという点において、ボランティア活動の単位化が災害ボランティアのコーディネーションにとっても重要な意味と密接な関連性をもつ問題として存在している。

4. おわりに

以上の東北学院大学災害ボランティアステーションでの活動体験をめぐっての検討を通じて、今後の大学による(災害)ボランティア活動への取り組みにかかわって若干の提言をすることで結びにかえることにしたい。

さて、ボランティアコーディネーターは、一般的には、ニーズとボランティアとのマッチングの役割を担う存在として理解されていることが多いのではないだろうか。これを今狭義のボランティアコーディネーターと呼ぶならば、今後は、次に述べるような広義のボランティアコーディネーターの制度的創生とその養成が急務な課題となっているように思われる。

もちろん狭義のいわゆるマッチングという重要で煩雑な業務の必要性はもちろん失われてはいない。しかし、いまさらに求められているのは、P D C Aのサイクルをもつ計画的・戦略的なプロジェクトの策定を含めて、先に述べたような教育的配慮をも含む包括的な災害ボランティアのシステムの開発とその運用を担えるだけの専門性と力量を備えた人材が必要になっていると考えられる。すなわち、ニーズの適切な把握はもちろんのこと、個々の具体的なニーズに適応するボランティア活動の内容やリスク管理などその提供方法等の開発、個々の活動に対応した研修や養成、活動の前後におけるそれぞれに密接な関連性をもつ事前、事後の重層的で立体的な学習機会の開発、財源の確保など、これらを一体的な持続可能なシステムとしてその運用を担うボランティアコーディネーターの制度的創生と養成が急務の社会的課題となっていると考えられる。併せてまた、このようなボランティアコーディネーターが常在する拠点施設(センター)こそが求められている。そして、拠点となる施設をもつ大学ごとにこうしたボランティアコーディネーターを複数名抱えるということは、おそらく現実的にはなかなか困難であろうことを考えると、そこではこうしたボランティアコーディネーターが相互に連携できる(インターグループワークの機能が発揮

される)ネットワークの構築も併せて重要な課題となるであろうと考えられる。

さらに、ここに述べたような人材養成と表裏の関係にあるものとして、このようなボランティアコーディネーターの存在とその役割の意義について正当に理解し、評価をするという社会的風土の醸成もまた不可欠の事柄となっていよう。

このボランティアコーディネーターの養成に係わって上に述べたことは、おそらくは広く一般的な意味での災害ボランティア活動による復興支援の現状をブレイクスルーしようとする際のポイントとしても妥当しているのではないかと考えている。その意味において、本稿もまた冒頭で紹介をした NPO 法人遠野まごころネット理事長多田一彦氏の「これが言いたい」「ボランティアは今こそ現地に」という呼びかけへの一つの応答になっていることを願っている。

最後に、被災者・被災地の苦悩や逡巡をめぐって私が遭遇したある体験について言及することを許していただくことにする。昨年(2011年)の8月中旬～下旬にかけて、石巻市、石巻市雄勝町名張地区、女川町を訪ねる機会があり、その際に、地域住民の方々から、それぞれに、復興・復旧をめぐっての希望や夢を力強く、熱く語られるという、未来に向けてのしっかりとした立ち位置を感じさせられる時間を一時過ごした。その時、同時にまた、遅々として進捗しない現状を見つめながら、復旧・復興の道のりに横たわるさまざまな壁や展望の不透明さについても冷静に理解されている(落胆やいら立ちを押し殺しながらの)言葉も聞くことになった。この時、私には安易に「頑張ってください」とも、「一緒に頑張っていきましょう」とのありきたりな言葉などとても口に出すことが出来なかった。そして、その場にいることについての不安定な関係性(私にとっての居心地の悪さ)を意識しない訳にはいかなかった。すなわち、私は、私たちには何が出来るのだろうかとの思いが頭をかすめた時、支え合うことに関わりつつけることの難しさについてはもちろんのこと、寄り添うことでさえその難しさと厳しさをその時思い知らされたのだと分かった(という気がしている)。その後、こうした体験への思いが心の何処かを占めている私にとって、私の生活の大半が仙台市内の中心部で過ごすという日常生活を送る中で、既に震災は終わりつつあるという醸成され始めてきている場の雰囲気から逃れたいという思いにたびたび囚われることとなった。しかし、被災地・被災者の置かれている現実に触れ、その復旧・復興への支援の必要性について感じ、思い、考えるところがある限り、たとえささやかであっても関わり続けること、凡庸であってもこだわり続けることが大切だという思いに今は至っている。災害ボランティア活動に係わることから学ぶこと、得られることは多いだろう。たとえささやかなものであっても良いだろう。東北学院大学で学ぶ学生の皆さんにも、是非在学中に、災害ボランティア活動に参加されることを期待したい。

*本稿は、『季刊 震災学』荒蝦夷(2012年7月刊行予定)に所収の拙稿「大学による災害ボランティア活動への取り組みに関する一管見—東北学院大学災害ボランティアステーションの体験から—」に、新たに「2. こうして東北学院大学災害ボランティアステーションの活動は始まった」を書き加え、その他全般にわたって必要な加筆修正を加えたものである。

注

- 1) この点に関しては、例えば、2011年5月14日の岩手日報(朝刊)には、「被災地のボランティア不足連休後に大幅減」と見出しのついた記事が掲載されている。同様に、2011年5月18日の毎日新聞(東京朝刊)にも「希望新聞：東日本大震災 ボランティアが減少 連休後、学校・仕事に戻る」との見出しの記事が掲載されている。
- 2) この大学間連携災害ボランティアネットワークによる「夏ボラ気仙沼プロジェクト」は、7月9日(土)～14日(木)の第1クールを始めとして、9月17日(土)～22日(木)の第11クールまでの期間で、麗澤大学、名古屋学院大学、桜美林大学、明治学院大学、西南学院大学、関西学院大学、東北学院大学等の大学の述べ302名の学生と教職員が参加して行われた。なお、この大学間連携災害ボランティアネットワークの主催によるシンポジウムが2011年12月16日(金)と17日(土)の両日、東北学院大学土樋キャンパス押川記念ホールで開催されており、関連する資料として、シンポジウムの記録資料「東日本大震災と学生ボランティアの役割—大学間連携による取り組みとその課題—」がある。併せて、参照されたい。
- 3) 2012年4月26日(木)毎日新聞(朝刊)「これが言いたい 『人も企業も入り続けること』が復興につながる ボランティアは今こそ現地に」。
- 4) 実は、本稿で取り上げたような初期に限定された簡単な災害ボランティアステーションの紹介ではなく、設立前の状況から、運営と活動を始めてから今日に至るまでの本学災害ボランティアステーションにかかわる多面的で詳細な振り返りの重要性と必要性についての認識もっている。災害ボランティアステーションの立ち上げに至るまでの過程やその後の実際の運営や活動、その間の全国の14の大学が参加しての大学間連携による災害ボランティア活動への取り組みを含めての本学の経験は、それを整理、検討し、フォーマライズすることまでできれば、今後予想される他地域での大規模地震の際にも活用され得る可能性を大いに持つものであろうと考えているからである。この課題については、改めて別の機会に譲りたい。
- 5) 因みに、ここで「災害ボランティアステーション」という呼称について、簡単に言及しておきたい。一般的には、大学内に設置されているものも含めてボランティア活動の拠点となる施設にはセンターが使われているようである。本学ボランティアステーションの場合には、急ごしらえの感が拭えないことや、またその内実から言っても、センターの名称を使用することには、少なくとも昨年3月29日の時点で若干のためらいと遠慮がわれわれの中にあつたことは否めない。しかし、当時から災害ボランティア活動におけるいわゆるハブ的機能を果たす施設となり得ることを意図していたことも事実である。多様な人々が行きかい、さまざまな人生が交差する機会を提供する

- 場となるという意味を込めて災害ボランティアステーションという名称としたのであった。
- 6) この本学災害ボランティアステーションのスキームを示す図表1については、当時ボランティア登録をする学生たちへの災害ボランティアステーションの説明やその他の機会でも利用されている。こうしたことへの対応を考えて、熊沢由美准教授にビジュアル的な体裁を整えていただいたものである。
 - 7) 上に紹介をしているように、本学の災害ボランティアステーションが活動を始める以前から、東日本大震災後において仙台市社会福祉協議会との間で良好な関係が保たれていたと考えている。その一つとして、現場でのヒヤリングを含めての青葉区災害ボランティアセンターでの数回にわたる見学など、本学の災害ボランティアセンターの設立と運営にあつたは、仙台市社会福祉協議会の皆様から多数の有益な示唆や助言を、また協力をいただいている。本学災害ボランティアステーションの組織運営体制もまた、仙台市に設置された災害ボランティアセンターの一つをモデルとしており、こうした意味において、ここでは「整えられた体制」という表現を使っている。
 - 8) この点に関連する資料として、東日本大震災復興学生ボランティア「大学生の参加経験に関するアンケート調査」(2011年8月～9月いわてGINGA-NETプロジェクトにおける調査結果 2012年3月26日)がある。この中でも、例えば、傾向として『コミュニケーション力』が伸びたと実感した学生が多い。」ことや「もともと自己評価が高い傾向にあった『積極性』と『その他(想像力)』に、さらに磨きがかかったとの自己評価。」についての指摘がなされており、また課題としてはあるが「全体として、ボランティア活動のインパクトは大きく、学生の『学力』の自己評価に与える影響も大きい。」ことなどが指摘されている。
 - 9) <http://www3.nhk.or.jp/news/html/20120408/t10014299961000.html>
 - 10) この点に関しては、前掲東日本大震災復興学生ボランティア「大学生の参加経験に関するアンケート調査」(2011年8月～9月いわてGINGA-NETプロジェクトにおける調査結果 2012年3月26日)においても、調査結果を総括した学生ボランティアの課題として、「大学として学生ボランティア活動を支援する際には、活動プログラム自体に何らかの教育的配慮を持たせることが望ましい。」ことや「活動後に高揚感を持って大学に戻る学生が、正課における学習密度を向上させることができるよう、カリキュラム上の工夫等を今後検討する必要がある。」ことなどが述べられている。

第36回 サマー・カレッジプログラム 講演Ⅱ

「私がこれまでやってきたこと」

北 博

1. 学生時代

- ・高校時代：偽善的な臭いのする一切の物への強い嫌悪感。既存の秩序の全面的破壊欲求。世のため人のために何か役に立ちたいというぼんやりした思いと、劣等感や隠遁欲求が交錯し、常に自殺願望と頑固な不眠症を抱えていた。
- ・大学時代前半：哲学に関心を持ち、最初はマルクス主義関係の本を読み漁るが、共産主義の理想と現実に左翼諸セクトの行なっていることとのギャップに幻滅し、一時引きこもり状態になりながらニーチェ、ショーペンハウアー、サルトル等（要するに全部反キリスト教の思想家）を手当たり次第に読み耽る。しかし、どうしてもキリスト教が気になる。
- ・大学時代後半：全学ストの期間中ずっとストイックな徹夜麻雀に明け暮れた挙句、突如享楽主義に転じ、仲間達と貪欲に遊び歩く。このままの生活が永久に続いて欲しいと願う。

2. キリスト教徒になってから

- ・これまでの「世のため人のため」に何かしたいという漠然とした思いは、「神のため」という言葉に収斂し、教会活動に夢中になる。この時期は、聖歌隊の活動(かなり忙しく、ハワイを含む各地への伝道旅行や、チョー・ヨンギ牧師来日の際は武道館で演奏も)に始まり、ゴスペルのグループを結成して各地を伝道演奏旅行、更に教会学校では中高科を担当し、近くの特別養護施設に生徒達を連れておしめたたみをさせてもらったり、コンサートや修養会等様々なイベントを企画し、実行する。いつも忙しく、疲れていたが、充実。しかし、次第にこれだけでよいのかという疑問が生じてくる。
- ・岩手県奥中山にあるカナンの園小さき群れの里に教会の有志で行ったことがきっかけになって、その後も度々主に青年会のメンバー達で訪れる。その後、このような施設で働くのが天職ではないかという思いが強まり、個人で行ったりするが、就職は断られる。
- ・教会の青年会有志グループの紹介で、山谷に出入りするようになる。そこで知り合ったカトリック修道士の余りに過激な神学に反発、激しい議論の末なぜか「越冬」に参加することになる。結局これがきっかけとなって山谷にのめりこみ、炊き出し、「 MARIA 食堂」や「ヤマ食堂」の手伝い、AA(Alcoholic Anonymous)の集まりへの参加、病院訪問等々、様々なことを経験する。後には個人でも、自分の住んでいる場所周辺のホームレスへの食料の差し入れ等をする。

2011 年度（平成 23）年度

東北学院大学宗教活動報告

2011(平成23)年度東北学院大学宗教活動報告

◇教員組織

宗教部長	佐々木哲夫
書記	永井義之
土樋 担当	佐々木勝彦、マーチー, D. N.、佐藤司郎、出村みや子
泉 担当	永井義之、野村信、原田浩司
多賀城担当	北 博、村上みか
大学オルガニスト	今井奈緒子
キリスト教文化研究所長	佐々木勝彦
総合人文学科長	原口尚彰

◇大学礼拝

月～土曜日	10時25分～10時45分(土樋朝、泉、多賀城)
水曜日	19時35分～19時55分(土樋夜)
月曜日	19時30分～20時00分(泉女子寄宿舎)
火曜日	19時30分～20時00分(泉、旭ヶ岡寄宿舎)

年間総出席者数

	2011年度			2010年度			2009年度		
	総数	回数	平均	総数	回数	平均	総数	回数	平均
土樋・朝	23,034	168	137	15,540	180	86	5,400	153	35
泉	57,805	168	344	63,104	180	351	45,755	154	297
多賀城	39,463	166	238	24,007	182	132	39,723	160	248
土樋・夜	1,484	28	53	2,091	32	65	1,301	26	50
総計	121,786	530	230	104,742	574	182	92,179	493	187

〔備考〕・春季・秋季特別伝道礼拝、大学クリスマス礼拝を含む。

・平均値の小数点は四捨五入。

大学礼拝総回数 621回〔3キャンパス(535)・寄宿舎(86)〕

外部(牧師)	256回
学内(理事長、大学長、キリスト者教員など)	72回
(宗教部関係者)	287回
〔内訳〕 宗教部長	29回
永井義之大学宗教主任	25回
北博大学宗教主任	24回
出村みや子大学宗教主任	25回

村上みか大学宗教学主任	26回
佐々木勝彦大学宗教学主任	26回
野村信大学宗教学主任	27回
佐藤司郎大学宗教学主任	21回
原田浩司大学宗教学主任	29回
原口尚彰総合人文学科長	24回
マーチー, D. N. 総合人文学科教員	26回 (英語礼拝)
今井奈緒子大学オルガニスト	5回
聖歌隊	5回

◇春季宗教学教育強調週間 特別伝道礼拝

震災により実施せず

◇秋季宗教学教育強調週間 特別伝道礼拝

日 時 2011年10月4日(火) 10時25分～11時20分 泉 (参加者649名)
5日(水) 10時25分～11時20分 土樋朝 (参加者166名)

説教者 深山 祐 日本基督教団国分寺南教会 牧師

聖書箇所 新約聖書 マタイによる福音書 第9章35節－38節

説教題 「主の憐みは深い」

日 時 2011年10月5日(水) 10時25分～11時20分 多賀城 (参加者285名)
10月5日(水) 19時35分～20時30分 土樋夜 (参加者 21名)

説教者 鈴木 眞 日本基督教団明石ベテル教会 牧師

聖書箇所 新約聖書 コリントの信徒への手紙一 第12章12節－28節

新約聖書 マタイによる福音書 第25章40節

説教題 「私にも夢がある」

◇第23回泉キャンパスクリスマス

日 時 2011年12月2日(金) 18時30分

場 所 泉キャンパス礼拝堂

説教者 原田 浩司 先生 (総合人文学科・大学宗教学主任)

説教題 『レット・イット・ビー』

内 容 第1部「礼拝」、第2部「クリスマスコンサート(演奏等)」(参加人数 423名)

◇大学クリスマス

日時・場所 2011年12月15日(木)10時25分 泉キャンパス礼拝堂 (参加者 888名)
// 16時30分 ラーハウザー記念東北学院礼拝堂(参加者 263名)
2011年12月16日(金)10時25分 多賀城キャンパス礼拝堂(参加者 477名)

説教者 雲然 俊美 牧師(日本基督教団 秋田桜教会)

説教題 『ご自分を無にされた救い主』(泉キャンパス)

『貧しくなられた主イエス』(土樋キャンパス)

『ここに愛がある』(多賀城キャンパス)

合唱 ヘンデル「メサイア」より抜粋

指揮 岡崎光治(作曲家)

オルガン 今井奈緒子 教養学部教授(大学オルガニスト)

独唱者 (バス) 熊木晟二(声楽家)

(ソプラノ) 鈴木美紀子(声楽家)

合唱団 グリークラブ、宗教部聖歌隊

◇第16回スプリング・カレッジ

日時 2011年5月21日(土)14時30分～19時00分

場所 泉キャンパス礼拝堂(1階)小礼拝堂・1号館(3階)第1会議室

内容 キリスト者等推薦入学生へのガイダンス

開会礼拝 原田浩司 大学宗教主任

挨拶 宗教部長

1) 年間宗教行事への参加について

2) 大学礼拝への出席について

3) 聖書研究会か聖歌隊のいずれかへの加入について

4) 出席教会の確定と報告について

5) その他(統一教会への注意など)

参加人数 学生37人、教職員11人(佐々木宗教部長、永井義之、原口尚彰、北博、野村信、村上みか、出村みや子、原田浩司、マーチー, D. N.、羽賀新一、坂本由香)

◇第37回サマー・カレッジ

日時 2011年8月10日(水)～12日(金)

場所 宮城蔵王ロイヤルホテル

主題 「ボランティア活動」

講師 経済学部教授 阿部重樹先生、大学宗教主任 北博先生

参加人数 学生29名、教職員8名(佐々木宗教部長、永井義之、野村信、北博、原田浩司、マーチー, D. N.、羽賀新一、及川純一)

◇第 57 回教職員修養会

震災により実施せず

◇キリスト者等推薦入学生との懇談会

日 時 2011年7月12日(火) 泉 参加人数 学生 33名、教職員 8名
2011年12月6日(火) 泉 参加人数 学生 35名、教職員 7名

◇礼拝奉仕者懇談会(事務職員)

土 樋キャンパス(昼・夜) 2011年6月2日(木) 14時00分～14時20分
参加人数 星宮望学長、柴田副学長、他 19名
多賀城キャンパス 2011年6月2日(木) 11時00分～11時20分
参加人数 星宮望学長、工学部長、他 18名
泉 キャンパス 2011年6月3日(金) 11時00分～11時20分
参加人数 星宮望学長、宗教部長、他 12名

◇礼拝オルガニスト懇談会

日 時 2012年2月13日(月) 11時00分～13時00分
場 所 8号館第一会議室
参加人数 33名(礼拝オルガニスト他)

◇礼拝司会者(牧師・宣教師)懇談会

日 時 2012年2月13日(月) 18時00分～20時00分
場 所 仙台国際ホテル
参加人数 36名(牧師・宣教師他)

◇宗教部会

開催日 2011年4月18日(月)、5月19日(木)、6月23日(木)、
7月21日(木)、9月29日(木)、10月13日(木)、
12月1日(木)、
2012年1月12日(木)、2月13日(月)、計9回

◇大学宗教主任会

開催日 2011年4月18日(月)、5月19日(木)、6月23日(木)、
7月14日(木)、9月29日(木)、10月13日(木)、
12月1日(木)、
2012年1月12日(木)、2月13日(月)、計9回

◇事務打合せ

日 時 2011年11月22日(火) 15時00分～17時00分
議 題 「2011年度補正予算及び2012年度予算案について」
場 所 泉キャンパス礼拝堂会議室
参 加 者 宗教部長、大学宗教主任、各キャンパス事務担当者

◇宗教部自己点検評価委員会

日 時 2011年10月13日(木) 16時00分～16時20分
議 題 「2011年度(前期)宗教活動報告について」
「2011年度(後期)宗教活動予定について」
参 加 者 委員長：宗教部長、委員：大学宗教主任

日 時 2012年2月23日(木) 14時30分～
議 題 「2011年度東北学院大学宗教活動報告について」
「2012年度東北学院大学宗教活動予定について」
参 加 者 委員長：宗教部長、委員：大学宗教主任

◇第34回青山学院大学・東北学院大学合同チャプレン会議

震災により実施せず

◇宗教部研修会

日 時 2011年7月21日(木) 15時50分～19時30分
場 所 仙台国際ホテル
発 題 I 「宗教部の会議のあり方とキャンパス・ミストリーについてのいくつかの提言」
II 「建学の精神と祈り」
発 題 者 発題I 北博大学宗教主任 発題II 永井義之大学宗教主任
参加人数 11名

◇第16回キリスト者教員研修会

日 時 2012年2月21日(火)
場 所 仙台国際ホテル
主 題 「東北学院建学の精神を今に活かす」
発 題 者 平河内健治理事長
参加人数 教育職員16名、事務職員1名

◇宗教委員会

日 時 2012年3月5日(月) 13:00～
場 所 土樋キャンパス 8号館 第1会議室

◇学長招待卒業生懇談会

日 時 2012年3月9日(金) 12:00～13:00
場 所 土樋キャンパス 8号館 第1会議室
出席者 星宮望学長、佐々木哲夫宗教部長、宗教事務課職員
卒業生参加予定者 15名

◇聖書研究会

土樋キャンパス	北博大学宗教主任	「聖書を現代」
	出村みや子大学宗教主任	「ラテン語で聖書を読む」
	村上みか大学宗教主任	「ドイツ語聖書を読む」
	〃	「ルカによる福音書を読む」
	原口尚彰総合人文学科長	休会(礼拝堂使用不可の為)
	佐々木勝彦大学宗教主任	「詩編を読む」
	マーチー, D. N. 総合人文学科	「英語で聖書を読む」
泉キャンパス	佐々木哲夫宗教部長	「旧約聖書から学ぶ」
	永井義之大学宗教主任	「使徒言行録を読む」
	野村信大学宗教主任	「詩編を読む」
	原田浩司大学宗教主任	「キリスト教信仰の基本」
多賀城キャンパス	長島慎二キリスト者教員	「聖書を読む」

◇宗教部聖歌隊

『宗教音楽の夕べ』(7月18日)合唱、音楽礼拝、各クリスマス礼拝、各演奏会等への奉仕活動

◇『チャペル・ニュース』

116号「新入生歓迎号」、117・118合併号「サマ・カレッジ・秋季特別伝道礼拝特集号」、119号「クリスマス特集号」

◇『2011キリスト教活動のハンドブック』

2011年4月1日発行

◇『礼拝説教集』

第16号(2012年3月末日発行)

◇『宗教活動報告書』

第 12 号 (2011 年 7 月 31 日発行)

◇その他

礼拝堂管理、図書資料受入、調査回答

◇キリスト教学校教育同盟関係

第 81 回教員夏期研究集会

震災により実施せず

第 55 回事務職員夏期学校

震災により実施せず

第 55 回全国大学部会研究集会

震災により実施せず

2011 年度キリスト教学校教育同盟

東北・北海道地区教育研究集会大学部会

日 時 2011 年 8 月 29 日 (月) ～ 30 日 (火)

場 所 仙台国際ホテル

主 題 「イエスの生き方に倣うキリスト教学校 —これからの同盟の 100 年に向けて—」

講 師 平河内健治 先生 (東北学院理事長)

講 演 「東北学院とキリスト教 —日本人キリスト者として生きる—」

講 師 大西晴樹先生 (明治学院大学学長)

講 演 「教育同盟百年 —未来への可能性—」

出席者 平河内健治理事長、星宮望学院長、斎藤誠学務担当副学長、原田善教経済学部長、伊達秀文工学部長、佐々木哲夫宗教部長、野村信大学宗教主任、出村みや子大学宗教主任、原田浩司大学宗教主任、松村尚彦経営学部准教授、日野哲総務部長

◇卒業記念礼拝

日 時 2012 年 3 月 26 日 (月)

説教者 佐々木哲夫 宗教部長

説教題 「地の塩、世の光」

東北学院大学教職員修養会 キリスト者教員研修会報告書

第 13 号 2012 年 6 月 30 日発行

発行責任者	宗 教 部 長	佐々木哲夫
編集責任者	宗 教 部 長	佐々木哲夫
出 版 社	株式会社アクトジャパン	
問い合わせ先	東北学院大学宗教事務課	
〒 980-8511	仙台市青葉区土樋 1 の 3 の 1	
	電話 022 - 264 - 6428	